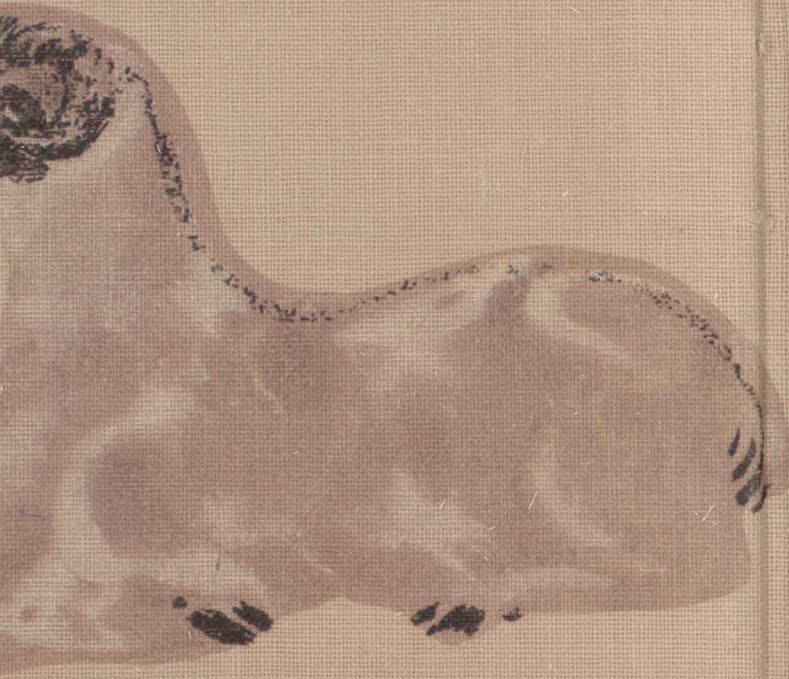


逍遙選集



第二



逍遙遊集

第二卷

校														編	監							
※	村	林	清	佐	紅	郡	菊	川	河	岡	榎	稻	石	秋	訂	山	印	大	集	坪	本	修
	松		水	藤	野	司	池	副	竹		本	垣	丸	庭	太	本	南	村		内	間	
	定	京		鉄	敏	正		国	登	保	隆	達		太		二	高	弘		士	久	
	孝	平	茂	弥	郎	勝	明	基	夫	生	司	郎	久	郎		郎	一	毅		行	雄	

逍遙選集 第二卷

昭和五十二年五月十五日印刷
昭和五十二年五月二十二日発行 復刻

編集 財団法人 逍遙協会

発行者 村口 一雄

発行所 第一書房

東京都千代田区猿樂町一―三―六
郵便番号 一〇一
電話 東京二九四―五五八三
振替 東京四―三九一二〇

印刷 モリモト印刷株式会社
製本 有限会社今泉誠文社

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

緒 言

本集に收めた鎌倉時代に關する三部作に就いては、その各に添へた卷頭もしくは卷末の文がほと其由來を悉してゐるから、こゝに改めていふほどの事はな
す。

「靈驗」以下「回春泉の試験」までは、文藝協會解散後、故東儀鐵笛其他の爲に起稿したもの。「骨董熱」は文藝協會の試演劇場で、古曲「藤娘」と共に、自作「鐘馗」を演ぜしめた時に、其發端劇として添へたものである。

大正十五年七月中旬

余丁町にて

著 者 識

目次

著者小照

緒言 壹

牧の方(第一作) 一

牧の方(改作) 一五三

名残の星月夜 二七九

義時の最期 四三三

靈驗 六〇五

現代男 六八一

翻案につきて 七一一

目次

翻案劇に就きて	七一八
ある富豪の夢	七二一
回春泉の試験	七五五
骨董熱	七八七
解題	一

拔

の

方

(第壹作)

(明治三十年春)

緒言

(明治廿八年中『早稻田文學』所載)

野史、稗官を貪り讀みしころの頭腦に多少の印象を残したりし眞假くさぐさの人物のうちに、その後そこばくの變化を経て、今もなほ残れるは、北條時政が後ぞひ、牧の方の面影なり。予がはじめて此の女性を知りしは、高井蘭山が演義『星月夜顯晦録』にして、その印銘を強めしは曲亭馬琴の作『朝夷巡島記』なり。みづからはさばかりとも氣づかざりしが、此の二作家が筆のあやは、わが幼稚なる頭腦に淺からぬ印銘を與へたりとおぼしく、口繪、挿繪なる面影は、數年の後までも、目に残りぬ。されば明治十四五年ごろ、東京大學の講堂にて、米人なにがしにしたがひて、はじめてシェークスピアが作『マクベス』を讀みし折にも、彼の影ふと胸に浮びて、レディー・マクベスと牧の方とを、いとよく似たるやうに感ぜしことあり。今にして思へば、牧の方とマクベス夫人とは其の性格はいふに及ばず、其の罪惡の性質も、其の動機も、はた其の經行も、すべて根柢より異なりたるを、其のころの分別のいかてかはえ判かたん、恰も『シーザー』の劇を意譯せんの心ありし當時とて、我れ若し『シーザー』を譯し果てなば、次ぎには此の作を翻案して、學友某らを驚さんなど、一時は思ひたちしこともありしが、もとより深く案じたることもなくて、年波は矢を射るやう

に流れて、明治廿一、二年となり、東京専門學校の講堂に、屢『マクベス』の作意を講じ、次いで『早稻田文學』の紙上に、同じ脚本を評釋するに及びて、又も舊夢の繰返されて、獨り前愚を笑ふこともあり、また、今昔の感といふこと、かゝる場合にもいふべくば、其の感はた淺からざりき。さるはいくらか目の肥えて、やう／＼彼の作のいみじさの知らるゝにつけ、當年のうぬ惚れ、野心、妄想は影を潜め、翻案の初一念は絶ちたりしが、なほ牧の方の面影は、マクベス夫人といふ對照すべき面影を得て、異同のいとしるきだけに、感銘一きはいちじるくなりきて、前とは異なりたる或感想、とかくに念頭を離れざりき。さる程にふと思ひ立つ由ありて、去年『桐一葉』を完了せし前後より、より／＼に正史、野乘、記錄、小説のいづれを問はず、牧の方に縁あるを求めて讀み、若しくは、曾て讀みし書をも、繰り返して讀むほどに、牧の方はいつか餘所よそになりて、みだりがはしき當時の世態、保元、平治の亂倫、鎌倉三代の罪惡史など、目に留まり胸に徹とほることぞ多かる。

上は白河、鳥羽の御みふるまひ、崇徳院の御みあやまち、義朝父子の悲劇、平家盛衰の大叙事詩、右大將がトラデコメデー、鎌倉三代間の因果應報、延いては承久の大亂まで、寔に是れ造化自然の大悲劇詩、若し紙背に透るといふ史眼ありて事件の隱微を讀むことを得ば、何者か造化の大作家たるを否み得べき。因縁果報の理脈、彰乎として掌紋を指すが如く、之れを讀む輩わかちをして覺えずも畏れ戦おそかしめ、やがて肅然として襟を正さしむ。彼の足利史をもて、最暗黒なる國史の部分なりと思

へる者は、疑ふらくは、特り勤王の觀察點より、わが帝國史を讀める批判家ならん歟。心理的方面より觀察せば、二千五百五十餘年の過去中、最も哀しむべき、最も痛ましき、最も怖るべき、最も畏るべき罪惡史は、遠くは白河の御宇に萌して、長く綿々たる業因を延き、彼の『愚管抄』の著者をして、「道理以外」なりと暗示せしめし、承久の亂に至りて一大頓挫せるにあらざる歟。而して其の罪惡史の絶頂は、蓋し、頼朝が死後に於ける、鎌倉將軍家の二代史なるべし。

見よ、右大將が墳墓の土は尙ほ未だ固からざるに、嬖臣梶原景時父子、右大將が在世には、それが連枝にして功名ありし九郎判官が傲慢をも挫き、剩へ蒲の入道をも冤死せしめし嬖臣梶原景時父子、一族郎黨、五十餘人、飛ぶ鳥をも落すべかりし暴威、春の淡雪と消えて、駿州清見が關の夕嵐に、しかばねの算を亂し、二代將軍紀の劈頭に、まづ大悲劇の端緒を發けば、之れを無慚の口繪として、陸續展開し來たる活修羅の繪卷物——尼御臺所の依怙偏執、北條父子が陰險、頼家が蕩佚、その墮落の經行、其の輔弼比企能員が野心、その露見、其の滅亡、これに連座したる一幡が非業の死、頼家禪室が幽閉、其の悲慘なる浴室の最期等——正史の表のみを見るときは、いづれも自招自致の業果にして、頗る單純なる應報たるに似たれど、之れを心性史の方面より觀れば、因縁果報の關聯、蓋し、甚だ、複雑なるものあり。夫の頼家をして酒色に溺れしめ、蹴鞠に耽らしめ、政務を怠らしめ、懦弱蕩逸に沈湎せしめしもの、豈ひとり彼れが性の失のみならんや。予は其の弟實朝の、往々

史家に寵せらるゝに比して、頼家の全く度外視せられ、史家の繼^{まこと}兒たるを憫ま^{あは}ずんばあらず。

さもあれ、斯の如きは、予が所謂鎌倉府罪惡史の一斑のみ。否、寧ろ保元以後、連綿として斷絶せざる一大罪惡鎖の一環のみ。さて之れに繼ぎて起こる修羅鬪争の慘劇、何ぞ其れ慘絶なるぞや。

仁田の忠常が冤死の悲劇、畠山重忠父子、一族郎黨が無慚の最期、稻毛入道重成が自業自得の末路、牧の方が奸計、時致が老耄、其の逆謀、其の露見、其の退隱、平賀朝雅があへなき滅亡、泉の親衛、和田の胤長等の不運なる陰謀、及び其の失敗、和田一門と北條義時との軋轢、首府の中央にての血雨劍電、前者の族滅、後者の全盛、深意ありげなる右大臣の遊惰、引きつゞく天變地妖、惡禪師公曉が淺はかなる暴舉、及び其の神速なる伏誅、其の他、此の間に點綴せる幾多無慚なる小悲劇、若しくは准悲劇、文覺上人が末路、六代御前の横死、熊谷直實が頓悟の動機など、若し前代までも遡りて種々の業因を算し來たらば、殆ど屢指するに堪へざらんとす。嗚呼、何等のむびたゞしき惡因惡果ぞ。時間は僅々十有七八年、而も此の期の活史乘を緝かんに、血痕の斑々たらざるページ、果たして幾何かある。嗚呼、彼の乾燥なる『吾妻鏡』はそも如何なる脫世間の歴史家の筆ぞや。予は其の冷靜なる記事の背に、沸くが如き貧瘡癩、燃ゆるが如き煩惱の陰顯するを認むる毎に、未だ曾て史筆の冷々然たるに驚かざるを得ず。予はいさゝか、東西の革命史を讀めり、革命期に伴隨せる罪惡は嘗て聞知せる所なり、豈罪惡の連續せる爲にのみ當期の史に駭かんや。予はその業因の遠

くして深きに駭き、又その亂倫の甚しきに驚く。革命の前後には罪惡ならび起る習ひとはいひながら、倫常のかくまでに腐れて、高きは雲の上の貴きより、低きは地下の卑しきに至るまで、只管私慾にのみ執着して、親子相殺し、兄弟相屠り、君を弑し、親族を虐げ、義理をも人情をも忘れ果てたるは、飢ゑたる狗の腐肉を争へるに似たり。當代の叙事詩たる『平家物語』が祇園精舎の鐘の聲に、其の悲哀譚の筆を起して六道輪廻の章に卷を了へたる、長明が『方丈記』に當代の苦叫を洩らし、西行が『山家集』に濁世を避け、無名氏が『愚管抄』に道理を説ける、げにとこそ思はるれ。嗚呼、世は舉げて禽獸となれりしか。そも／＼また此のあひだにも、幾多人情の濃淡あるにや。予は他の平然として當代の史紀を読み、しかも亂世の一語をもて此の空絶なる暗黒史を蔽ひ、何等の感得せる所も無き世間尋常の讀史家を異しむ。彼等は人間の時としては野獸に墮落するを當然事となせるか。其の大墮落の因縁には何等の感慨をも寄せざるか。予は從來の史論なるものゝ頗る淺膚なるを怪しまざるを得ず。

まづ此の墮落の絶頂期ともいふべき鎌倉三代間の罪惡を検せよ。正史の傳説する所のみによれば、源二位が罪惡も、梶原が罪惡も、頼家、能員等の罪惡も、時政の罪惡も、將た本論の女主人公たる悍婦牧の方の罪惡も、因縁薄弱なる罪惡たるに近く、彼等を私慾一方の半獸的動物と見做し、若しくは淺慮粗忽なる人物と見做さざる限りは、因果の關係を悉しがたき趣きあり。他は暫らく措き、

ひとり牧の方の罪惡を検せよ、又時政が逆意の動機を按ぜよ。史に見えたる零碎なる事實は、彼等を常識無き愚人とせざれば、目前の私慾にのみ執着せる半獸的動物たらしめんとす。乞ふ、試みに左の史筆を見よ。

時政諸子母氏各異、牧氏最後所娶、傾險驕恣、時政寵憚之、所言皆聽、平賀朝雅、畠山重忠皆時政女婿、而重忠妻非牧氏所生、重忠子重保與朝雅忿爭、朝雅讎之牧氏、牧氏乘間誣以謀叛、請殺重忠父子、時政遣兵殺重保、遂遣將殺重忠於二股川、人以爲冤、牧氏以朝雅亦源氏疎屬、欲彊時政殺實朝立朝雅、密聚兵士、政子使三浦義村、結城朝光等、取實朝移居義時家、用義時計、勒兵燭實朝命、如將誅時政狀、迫使別髮、并牧氏徙于北條、云々。

假に時政をば耄せりとせんも、牧の方の逆意には若干の因縁なかるべからず。按ふに、當時實朝は齡はづかに十三歳、名は將軍といふと雖も、實は露ばかりの權力あるなし、而して上には威權宏大なる尼御臺あり、下には尼御臺の腹心にして一味同體なる相模守義時父子あり、左右には和田、大江、三浦の諸黨あり、幼主を弑し得たりとするも大事の成らざらんは彰として明かなり。かゝる自明の理をだに解せざる狂愚の婦が、時政を魅し得たるは不可思議ならずや。或は史筆の不具なるが爲か、と更に原史に遡りて見るに、『保歷間記』には下の如くあり。

さて時政權を取る間その妻女牧の女房と申人心武く驕れる人なりけり元久二年六月廿二日畠山次郎重忠四十二才にて誅せられたり其故は重忠時政の甥也武藏左衛門

佐源朝雅朝臣も平賀子也。義時政の掣なりけり。朝雅は牧の女房一腹の掣なり。重忠は二位殿尼御臺所義時以下の前の妻女の一腹の掣也。中惡くして不思議の讒言ありけるにや。又牧の女房思立事もありけるにや。重忠は弓箭を取ても無双の仁なり。當將軍の守護の人なり亡さんと思て牧の女房重忠が従弟三郎入道重成法師を語らひて二俣川にて被誅畢、同廿三日重成法師舍弟榛谷四郎重朝も後惡かりなんとて打れ畢、不思議なりし事共なり、かやうに萬思ひの儘なりける程に彼の女房思ひけるは我掣の左衛門佐朝雅當時京都に上りて時政が代官として指置昇殿しけり。是も伊豫入道頼義朝臣六(五?)代の末なれば將軍に成さんに何の子細かあるべきと云て當將軍を失ひ奉らんとて時政の家へ同七月廿日奉請て湯殿にて失ひ奉らんとしける。な二位殿聞食て式部丞義時を召てかゝる不思議ありと仰らる。義時急ぎ馳向て見奉るにはや湯殿へ入り賜はんとしけるを懷き奉て御所へ入奉りけり。こはなに事ぞと仰らる。二位殿しかゝの事申させ給ふさては義時とても心ゆるすべからずと被仰けるに。義時事の由を申述たりければ時政を計て進ぜよとありければ、さん候子細候はじとて則打て候とて伊豆國奥山なる所に押籠つ、牧の女房をも同國へ則流さるゝと聞きしが。後は不知、朝雅なば京都にて同二十七日被討けり。時政此の事争か知らざるべきなれども女性の計に付きけるか。老耄の至か不思議なりし事なり、二位殿の御計にて義時を時政に替て將軍の執權とす。相模守とぞ申ける。

是れ將た罪惡の因縁に關して些も説明を加ふる所なし。讀者は更に他の舊記を探らざるべからず。そも、當年の事績を窺はん料は、正史にては、前に挙げたる『大日本史』、又其の元となる『吾妻鏡』、『愚管抄』、『保曆間記』、『北條九代記』、『神皇正統記』若しくは零碎なる日記類、演義體の書類にては、上に挙げし『顯晦錄』、八文字屋版にて、疑ふらくは、蘭山が種本かとも思はるゝ、『武德鎌倉舊記』、『顯晦錄』のやゝ荒唐なるものとも見るべき『鎌倉新話』、『鎌倉見聞志』といふ未讀の書『鎌倉舊記』の後篇、『鎌倉繁榮廣記』など、又地理と纏綿しては、『相模風土記』、『鎌倉志』、『鎌倉物語』など、又純然たる小説には、前に、いへる『巡島記』、それを合卷に翻したる種員が『島巡浪間朝比奈』、書名も作者（萬亭應賀？）も忘れたれど、予が稚きころ一讀せし『顯晦錄』の翻案とも見るべき豐國畫の合卷（『東日記』）、尙ほ此の外にも若干あらめど、牧の方の事績に關したるものは、おほよそ此れ程に過ぎざるべし。さて此等の諸書に縋りて牧氏が罪績を探り見るに、やゝ注意すべき要點は、はづかに左の數ヶ條に過ぎず。

一 牧の方は「大舍人允宗親と云ひける者の女なり、兄は大岡判官時親とて、五位尉に成りてありき、其の宗親賴盛入道がもとにつがひて（本ノマ、）駿河國の大岡の牧といふ所を知らせけり」（『愚管抄』等）。

一 牧の方は時政の後妻にして、齡は夫時政よりもはるかに若かりしものゝ如し。『愚管抄』には

「時政若き妻を設けてそれが腹に子共設け女多くもちたりけり」と見ゆ。

一牧の方の一腹の子は、諸書に見えたるは平賀朝雅に嫁せし女某と政範とのみ。(政範は齡はづかに十六歳にして左馬の權ノ介に任ぜらる、こは牧の方が寵愛のあまり、ひたすら時政に勧めて、申し請はしめし結果なりといふ)。尤も『愚管抄』によれば、牧の方が生める女子尙ほ此の外にも多くありて殿上人の妻となれりしに似たり、曰はく「こと女ども皆公けに殿上人どもの妻になつて過ぎけり」云々。

一牧の方は『保曆間記』の所謂「心武く驕れる」のみにあらず、嫉妬偏執の心深く、又頗る奸智にたけたりし女性と見ゆ。頼家、能員、忠常、重忠の殺されしは、直接若しくは間接に皆彼れが毒舌にかゝれるなりといふ。

一牧の方と先妻腹の子等と其の中睦じからざりし跡は諸書に見えたり。こは前に挙げたる『保曆間記』の記事にも明かなれど、『吾妻鏡』、『顯晦錄』、『九代記』、『鎌倉舊記』等はた屢其の影を示せり。就中『舊記』には重忠、稻毛等を誣殺せしも、畢竟は繼兒の讐なればなるべしといへり。

一牧の方が畠山重忠を讒殺せしは、頗る複雑なる因縁あるに似たり。大望の邪魔となる將軍家の守護人といふも其の一理由なるべけれど、繼兒の讐といふことも、たしかに一條の縁なりしな